

久保地尾根遺跡から平安後期の遺物

# 棒状の鉄製品も出土

## 原村教委 発掘調査 3m超の遺構 墓の可能性

原村教育委員会が行った久保地尾根遺跡（原村室内）の発掘調査で、竪穴から平安時代後期の遺物が出土し、そのうち用途不明の棒状の鉄製品が見つかった。同遺跡で鉄製品の発掘は初めて。村教委文化財係によると、諏訪地域でも類似したものはない「かなり珍しい遺物である可能性がある」といい、今後分析していく。また同係は、遺物が出土した竪穴は現段階で墓の可能性が高いと考察。同時期の3層を超える大型の墓は諏訪地域では見つかっておらず、遺構として珍しいものであると考えている。（町田陽）



鉄製品など遺物が出土した竪穴（原村教育委員会提供）

同遺跡の調査は1994年から本格的に開始。これまで、縄文時代の土器や住居跡、平安時代の土器などが見つかっている。宅地造成に伴う今回の調査は3月下旬～4月中旬にかけて実施した。不明の鉄製品は、竪穴の中央付近、地表から深さ約80センチで出土。全体がさびで覆われており、片側の先端にはソケットがみられる。さびがある状態で長さ約27センチ、幅約4センチ、厚さ約2・6センチ、ソケットの直径

約3センチ。今後、県立歴史館（千曲市）でX線などの分析を行う予定で、県内外でも珍しい出土例が調べていくという。このほか竪穴からは、土師器（坏）8点、同（破片）56点、灰釉陶器（碗、皿、つぼ）5点、鉄製品（刀子、毛抜き）2点が出土した。

竪穴は、かまごや柱穴などが見られていないことや出土品などから墓と考えられるという。約3×2層の大きさで、平安時代後期（10～11世紀代）のものと思われる。同係は、墓であった場合、規模や出土した遺物の内容から「この辺りでも有力者・権力者の人の墓だった可能性があるのではないか」と推測。遺物も含めて調査を進め、今年度中には報告書をまとめる予定という。



久保地尾根遺跡から出土した平安時代後期の用途不明の鉄製品

